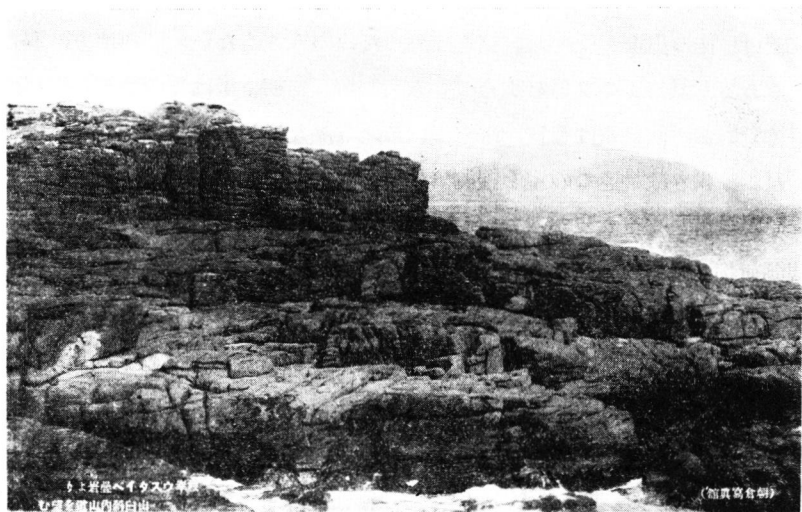


日食の枝幸を憶ふ (上)

柴 田 淑 次

1 オホ1ツク海

ベ1リング海峽より流れ出る北氷洋の寒流が、千島の間を通り抜けて、鯢々數百里、北海道の北岸と樺太とを洗ふ處、其れはオホ1ツク海である。渺々數千方里、雪や氷に閉ざされて、小舟さへも通はず、北極より吹き下す凍つた様な寒風に、飛雪粉々として舞ふ北の海をば想像下さい。やがて萌え出す春と共に、氷の海が幾つかに割れれば、日毎太陽の赤緯が北へ北へと高



枝幸ウスタイベ疊岩よりオホ1ツク海を越え山白斜内山道を望む

くなる。梅と櫻と鈴蘭が相前後して曠野に咲き亂れる頃ともなれば、北の國にも夏が近い。私達の日食觀測隊は、丁度其の頃枝幸に着き、丁度此の頃枝幸を去つた。菱形の北海道の北端に近く、オホ1ツク海に面して少さい錨印のある漁村、此れが日食の枝幸である。海岸傳ひに雄武へ15里、濱頓別へ10里、多年北海の荒波に洗れた濱の眞砂は見えない程細かい。砂金を流すと云ふ幌別川を越えて1里餘雄武へ向つて、天然の海水浴場を作つて居る。宗谷本線に別れて北見線の小驛「小頓別」より更にバスで2時間、なだらかな丘陵

の盡きる所が枝幸の濱である。村迄濱傳ひに更に10町餘、今日も北國の太陽が眞赤な夕焼を残して低い西山にかくれる頃、オホ1ツク海の海の色が青より暗青に、それから紫に變つて、やがて東の空の星蔭を映す頃迄、私達はよく此の濱邊を散歩した。滞在40日、長い様だけれど私には短かつた。見果てぬ夢の名残とは云へ、オホ1ツク海は私にとって忘れられない美しい思い出である。

2 10度高いボラリス

西に低く三笠山、北より東にかけては遠く松並木の遙か向ふにオホ1ツク海を望み、南には思ひ出の日食校舎、それに列つて又松並木、丁度其の中に小学校々庭があり私達のキャンプがある。太陽によつて大體決めた子午線に沿つて、西にコロナグラフ、東にスペクトログラフの小屋がある。バラツクとは云ふものゝ、シロスタツトの覆ひには思ひ切つて、レール付きの移動小屋にしたし、分光器をのせる臺も、思ひ切つて廣く作つたし、屋根をドン天返しにしたり、小屋の回りに太い柵を作つたりして、日食観測キャンプとしては決して貧弱ではなかつた。30種のシロスタツトと第2平面とによつて照り返される太陽の光は、三つの60°プリズム(約6cm)に分析され、10cm F 15 のレンズの焦點に五色の虹を結ぶ。緑(5000 Å)より赤末(7000 Å)に互りピントグラスの上に燃々として輝くスペクトルは、一昨年南洋ロソツブで椰子の木陰で眺めた虹と變りない。もともとスリットを使はないスペクトログラフであるので、その美しさは例へ様が無い。更に焦點を決めるために用ひたコリメータによつて生ずるフランホッフアの暗線は又別な趣きがあつて美しい。分光器の調節に、来る日も来る日もいそがしかつた。折角作つた観測臺が低すぎて接ぎ足したり、プリズムの僅かな狂ひで焦點面に僅か出なかつたり、思へば幾多の支障があつた。それにしてもシロスタツトの調節程印象深いものはなかつた。極軸にピッタリと小望遠鏡をのせ付けて、北極星をにらみつゝ僅かな狂ひを修正して行く藝當には、色々困難も伴つた。庭に腹ばひになり餘程遠方より極軸と望遠鏡とをにらんだ時には、雨上りの地面に一面にガスが流れて居た日もあつた。夕食を済まして見上げた空は一點の雲もなく、頭上高くトド松の梢に「大熊」がひつかゝつて居た。街燈の殆

んどない道を懐中電燈にたよりながら宿舍よりキャンプへの約半町の間、西山低く淡い弦月がかゝつて居たボルツクスの方經過によつて、シーロスタツトのセツティング。ボラーリスは變らないが京都よりも10度高い此の地では仰ぐべく其れは餘りに首が痛い。もう一度校庭にはらばひになつて荒木(九)君と交代で仰ぐボラーリスに、夜更けの冷氣がしんしんと忍び込んで来る。やがて琴が高くない、すき通る様な銀河を脊に受けながら仕事を終へて歸る私達を、遙か南の地平線から天の支配者ジュピターが見送つて居た。5月もすみ、6月にはいつて私達は一通り器械の調節を終つた。引續いて、乾板の指示曲線の決定。楔のない私達はコリメターのスリットの前にセクターを廻して、其の目的を遂げる乾板のセンシタイザーの臭いと晴空の臭ひは、終りには返つてなつかしいものとなつてしまつた。廻轉するセクターの上に映する太陽の像は、心なしか京都のそれより僅かに淡い。無理をして御願ひした晝間送電と、天氣状態とが得てして平行に行つて呉れなかつたのはさても辛い思出であつた。併し八つ切の乾板に、心持よく數個のスペクトルを並べ得たのは、誰よりも朗らかな私達であつた。かくして10度高いボラーリスの下で、日毎夜毎の建設の間にやがて来るべき日食の日も、1日々々と迫つて来る。荒木君擔當のクロノグラフ(此れは、スペクトルグラフのシャッター開閉の時刻を記録する)の出來上る頃、日食前3日、6月16日の午後より豫行演習と云ふ事になつた。日食前日たまたま風魔のいたづらか、南西の暴風が吹きつけて機械は勿論、小屋迄倒されるに至つた時は、どうしようかと思つた位だつた。そのため其の日の豫行演習が遂にお流れになつたのは、返す返すも残念だつた。明れば6月19日、太陽の緯度は正しく北緯23°京都を離れて30數日、笑ふも泣くも最後の2時間、かくして遂に其の日は來た。前夜に祈るボラーリスはやはり依然として10度高かつた。(つゞく)